

平成 13 年度第 2 回大台ヶ原ニホンジカ保護管理検討会

保護管理作業部会 議事要旨

平成 13 年 7 月 23 日～24 日

1. 議 事

(1) 報告事項

大台ヶ原における既存調査について

(2) 現地被害状況および防鹿柵設置状況視察

(3) 審議事項

大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（案）について

2. 議事要旨

大台ヶ原ニホンジカ保護管理計画（案）について

- ・ 目標を 50 年、100 年とするのではなく、長期的目標を 20 年から 30 年とするとよいのではないか。普通は当面の目標は 5 年で、5 年、10 年、20 年ぐらいで考えないと積極的な手を考えられない。
- ・ トウヒの成林は 100 年ぐらいなので、最終目的として 100 年後の目標を掲げるとよいのではないか。
- ・ 背景のところ、自然がこんなに瀕死の状態だということを書き、これを回復するためにある程度人為的な管理が必要なので、成林するのを補助するという意味合いで、ある程度までは手を加えるということでもいいのではないか。
- ・ 背景で全体的な目標を示し、今回の計画は短期目標だということを示せばよい。
- ・ 計画区域のうち緊急対策地区では防鹿柵など具体的な対策をし、監視地域ではそれなりの監視をし、計画区域には入らないが監視する地域の 3 つにしたらよいのではないか。
- ・ 周辺地域は線を決めず、少なくとも計画の区域や特別保護地区については環境省が責任を持つことを示す。
- ・ モニタリングの地点設定でも対象範囲が問題になるので、影響が及ぶことが考えられる最大の範囲とするとよい。
- ・ 区画法と糞粒法で生息状況の傾向は変わらないので信頼性は高い。両方の結果をあわせて地域の特徴を説明すればよい。

- ・過去からの変遷の問題と現状を分けてほしい。個体群動態の指標として生息密度の年次変動を入れてほしい。
- ・大台ヶ原の個体群は多様性が高いということを地域個体群の特性として入れるように。
- ・大台ヶ原の周辺地域の捕獲状況については、有害鳥獣も狩猟のデータも入れるよう検討してほしい。
- ・被害対策のところでは周辺地域の現状として被害状況について入れるとよいのでは。
- ・大台ヶ原での被害状況の結果については、東大台と西大台と分けてまとめるように。そうすればシカの密度との関連が出ると思う。
- ・被害状況は針葉樹と広葉樹と分けるべき。
- ・経年変化を見る場合には累積された被害を見るが、新しい被害が毎年どれだけ増えるかも見る必要がある。累積の被害データより新被害を求めればよい。
- ・被害状況のモニタリングでは、シカの密度が低くなったためなのか、柵やラス巻きの効果によって被害が減ったためなのか、利用可能な木が減少したからなのか区別できるような解析方法を考える必要がある。
- ・シカが利用可能なものの現存量に対して被害を評価することも考える必要がある。柵ができたことによって周辺の被害が増えるかもしれない。
- ・モニタリングの調査地点は柵で囲わないことも考える。または、調査地点を減らす。過去のデータについては経年変化を出し、新被害もまとめる。直径階分布も作成する。
- ・保護管理の目標は、「健全なシカ個体群の維持を図るとともに自然植生への影響の軽減を図る」でよいのではないか。
- ・シカの数にこだわらずに、被害のレベルを下げることを中心に考えるのではないか。
- ・植生を優先するところで柵を囲うと、シカが移動してインパクトの比重が変わるので、柵で囲うことと、捕獲することは並行すべき。
- ・管理ができない場所は、シカの保護区、非狩猟地区とするなどでもよいのではないか。
- ・柵を設置するまでに時間がかかり、その期間放置しておくわけにいかないで、基本的には柵で植生を保全するところも、捕獲によって個体数調整をするとよいのではないか。
- ・植生保全を中心とすれば、シカ排除地域とシカ共存地域の2つになるのではないか。
- ・植生の保全の優先度と以前の柵の設置予定図と被害レベルから、特別保護地区内を地区区分すればよいのではないか。

- ・計画区域の地区区分は、A地区：植生保全を優先とする地域、B地区：シカ個体群の維持を図りながら植生の保全を図る地域、C地区：シカの健全な個体群の維持を図る地域という区分にして、特別保護地区では、A地区とB地区の2つになるのではないかな。
- ・被害レベルが変わっていく可能性があるので、柵の設置場所等は見直す必要がある。
- ・柵がどのくらいの大きさのものまで設置できるのか考える必要がある。
- ・実際柵を設置する場合、1年でどのくらいの面積を囲うことができるかが問題となるので、植生保全を優先する地域でも柵とラス巻きと捕獲ということも考えられる。
- ・将来的には、柵で囲ってシカを排除した後に森林の更新が進むのかどうかを考慮していかなければならない。
- ・保護管理の目標をシカの絶対密度にするのではなく、指数にすればよい。
- ・奈良県の計画でのC地区というレベルで保護管理の目標を考えるのも一つでは。
- ・柵で囲った範囲で生息していたシカを捕獲するという考えでよいのでは。
- ・基本的にはサブプロット（5×5m）を設置するより、20×20mのコドラート内ですべて下層植生を調査するとよい。最初の年には詳細な調査が必要、その後は必要に応じて減らせばよい。